

一切は心より転ずる

名取 芳彦

名取 芳彦 (なとり・ほうげん)

1958年東京都生まれ。大正大学卒業後、英語教師を経て、現在、真言宗豊山派布教研究所主任研究員、真言宗豊山派布教誌『光明』編集委員、鹿骨元結不動蜜蔵院住職。

イチゴのツブツブの正体が種だと知って驚き、その種一つ一つを丁寧に取り、脱脂綿の上に置いて発芽させた人がいます。私は「生物学に興味があるのか、それとも仏教に興味があるのですか」と質問したことがありました。

私もお赤飯の上にある胡麻を一粒つまんでしげしげと眺め、「この一粒の中に、根や茎や花や葉、そして種のもとが全部詰まっているのだ」と感激したことがありました。赤飯の上の胡麻は加熱してあるので発芽しませんが、加熱される前には発芽する可能性があったのです。

イチゴツブツブ育成者に「仏教に興味があるのですか」と聞いたのは、「迷いもさとりも、あなたの外でなくあなたの中にある」という如来蔵の教えが仏教にあって、私もその通りだと思っていたからです。一粒の種の中にすべてが内蔵されていることを自ら確かめようとしていたとすれば、彼は仏教者の一人なのです。

日本に伝わっている仏教では、お釈迦さまがさとれたのは“さとらせる力が働いたから”と考えます。輪廻をくり返して修行を重ねた結果というよりも、35年の人生で経験したこと、感じたことすべてが総がかりでお釈迦さまをさとらせたというのです。

お釈迦さまのお母さん（マーヤー）は産後の肥立ちが悪く、お釈迦さまを生んでまもなく亡くなってしまいます。「お母さんがいたらなあ。寂しいなあ」とも思ったでしょう。お父さんはシャカ族の王さまですから、国は王個人のものなのか、人々が安心して生きていける土地なのかも考えたでしょう。家臣の中には、誰にでもやさしい人もいれば、上には媚びへつらい、下には横柄な態度をとる人もいたでしょう。仲間の手を引いてあげればいいのに足を引っばるような輩も目の当たりにしたはずです。

結婚する時には「一人を選ぶということは、他の候補者を諦めることだ」と覚悟もしたでしょう。子どもができて初めて親の恩を感じたかもしれません。

女房子どもや王子という立場を捨てて出家するには、相当の目標設定とそれに向かう勇気と行動力が必要だったでしょう。

他にも、諸行無常を地で行く季節の変化、太陽や雨の恵みと過酷さ、暗い中で光り輝く満月にまだ見ぬさとりを重ね合わせたかもしれません。

こうしたことがすべて縁となり力となって、寄ってたかって若き日のお釈迦さまを悩ませ、結果的にさとらせたと考えるのです。

ここからが仏教の面白いところです。お釈迦さまをさとらせた膨大な縁や力は、2500年を経た現在でも、私たちの回りにすべてそろっています。

言いかえれば、お釈迦さまがさとりという料理をつくり上げる材料になったやさしさ、勇気、裏切り、イライラ、自己顕示欲、諸行無常などの材料はすべて、そのまま私たちの前にあるのです。その材料を使うか否かは私たちしだいです。上手に使えば、私たちもさとりという料理が作れます。これが私たちも成仏できる根拠の一つですし、そのためのレシピが仏教の教えと言ってもいいでしょう。

私たちが日常で経験する嫌な思ひは、ことごとく自分の都合通りにならないことが原因です。自分の都合通りに物事が進めば、誰も嫌な気分になることはありません。

雨は私たちの活動を制限しますから、雨が降ればげんなりするでしょう。しかし、雨を嫌がらない人もいます。雨が降るとお母さんが傘を持って迎えにきてくれると喜ぶ子どももいれば、自分が作った傘を嬉しそうにさしてくれる人いるのを喜んでいる傘職人もいます。いいお湿りとして感謝する農家もいます。雨をどうとらえるかは、その人の心しだいなのです。

家内は私の部屋を「散らかっている」と表現しますが、私にすれば万華鏡のようです。

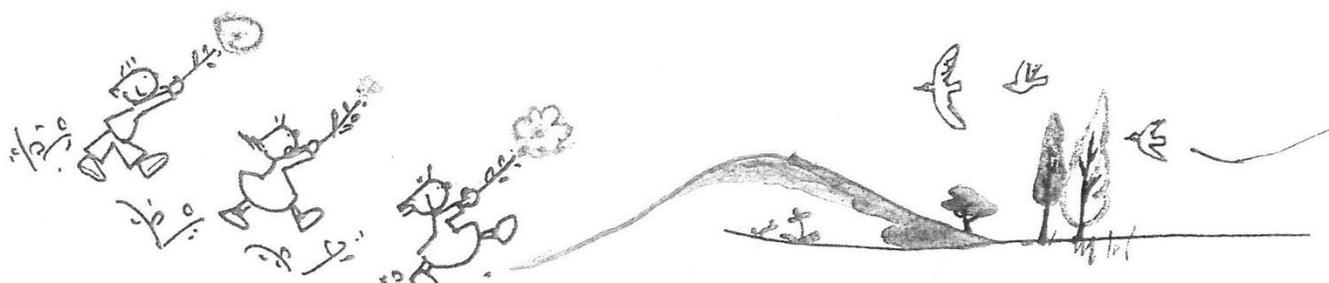
このように、すべてはあなたの心が決めていることで、仏教では、「一切は心より転ずる」とします。

だれかがあなたに悩めと命令しているわけでもなく、怒れと焚きつけているわけでもありません。あなた自身がそうしているのです。同様に、心をおだやかにするのも、あなたをおいて他にはいません。

徳のある人は己を責めて自己を高め、徳のない人は他人を責めるだけで自分磨きの材料にしません。

さあ、腕まくりをして目の前にある材料を使って、いつでもどんなことが起こっても心がおだやかな“さとり”という料理を作るキッチンに、立ってみてください。

六波羅蜜シリーズ 『布施 施しのころ』 より



■ 小学生ボランティア

普光院 亜紀（保育園を考える親の会顧問）

わが家がお世話になった保育園は、25年前、夏休みの期間中、小学校5年生以上の卒園児をボランティアとして受け入れてくれていました。放課後児童クラブ（学童保育）は当時、小学校3年生までだったので、5年生とはいえ夏休みに毎日保育園に通ってくれることは、親にとってはたいへん安心なことでした。

朝、決まった時間に登園し、先生の指示に従ってさまざまな作業をします。掃除、プールの水抜き、保育のお手伝い…。娘は赤ちゃんのお世話がしたくて、いつも手を挙げていたようです。希望がかなった日はとても喜んでいました。お昼ご飯を食べたあと、午睡の時間には、学校の宿題をすることになっていました。卒園児に、そんな豊かで安心な生活を送らせてくださった保育園に、心から感謝しています。

そして、そのときの経験が、今の娘の子育てに役立っていることは間違いありません。技術的なことではなく、小さな子どもをいつくしむ、その存在を受け止める気持ちを培ってくれたように思うのです。この夏休みボランティアは、今も続いているそうです。もしかしたら、これはすごい「異次元の少子化対策」かもしれないと思っています。

■ 放課後事業にも「養護」を

ところで、放課後児童クラブの待機児童が問題になっています。量的な問題もさることながら、私は、質もとても気になっています。特に、東京23区などでは、学校の遊び場事業と融合しているものが多いのですが、定員がなく大規模化していたり、落ち着ける居室の環境がなかったり、居場所としての安心感を欠くものが増えているように思います。指導員には、子どもを受容して心の拠り所となってくれる存在であってほしいと願いますが、そこまで求められない状況が見え隠れしています。

放課後の子どものニーズはさまざまです。遊び場事業で十分という子どももたくさんいるかもしれませんが、親の仕事の状況、家庭環境、子どもの個性によっては、保育園と同様の養護的機能を必要としている子どももいるはずです。

いろいろな特色をもつ放課後事業があって、自分の合うところを選べたら、子どもは助かるだろうなと思います。その中に、保育園が運営するあたたかいクラブがあってほしいです。学齢期の子どもたちの心の問題にもっと目を向けるべき時代になっていると思います。

2023年9月保育界、保護者の立場から